



雨と風の音で、目が覚めました。

昨夜は風が気持ちよかったので、窓を開けていました。

なので、窓ぎわにおいた机がすっかり濡れてしまいました。

部屋の電気を消して、目をつぶってみても、なかなか眠れない夜でした。

久しぶりに、羊でも数えよう。

まぶたの中に草原を描き、柵をひとつ、立てる。

さっそく、羊が一匹現れました。

眠れないなら、無理に眠らなくても良いじゃないか。

羊が言いました。

歩きながら考え事をしたり、
食べながらしゃべったりは出来るけど、
眠っている間は、それだけしか出来ない。
それに眠っても、お腹がいっぱいになるわけでもなければ、
問題が解決するわけでもない。

君の年にもなれば、いくら寝たところで
成長の助けになるわけでもない。

せいぜい、疲れを取ることにしかないけれど、
自然に眠れないということは、
君は大して疲れているわけではないのだろう。

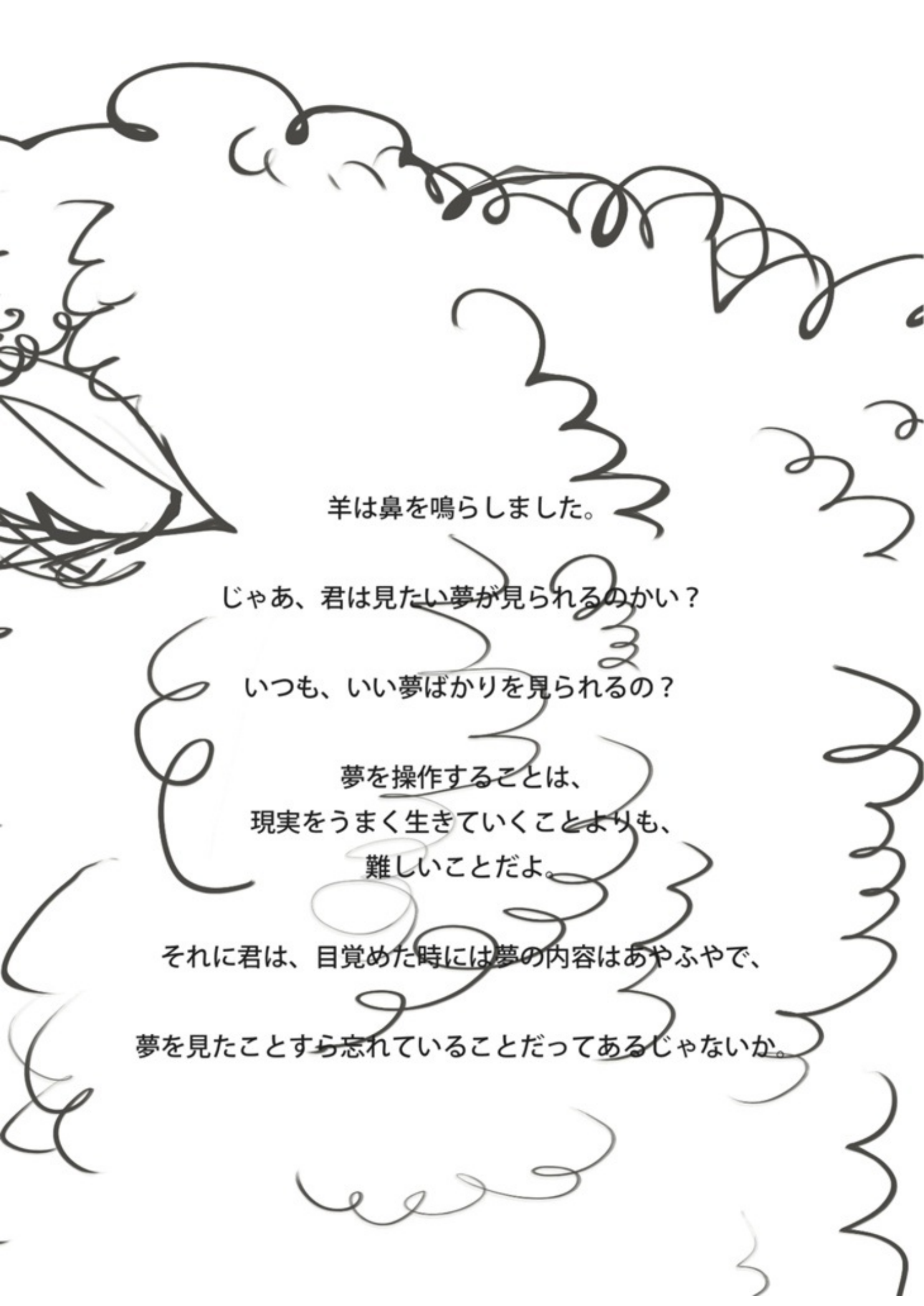
何の意味もないよ。

時間の無駄だよ。

なのに、どうして眠りたいの？







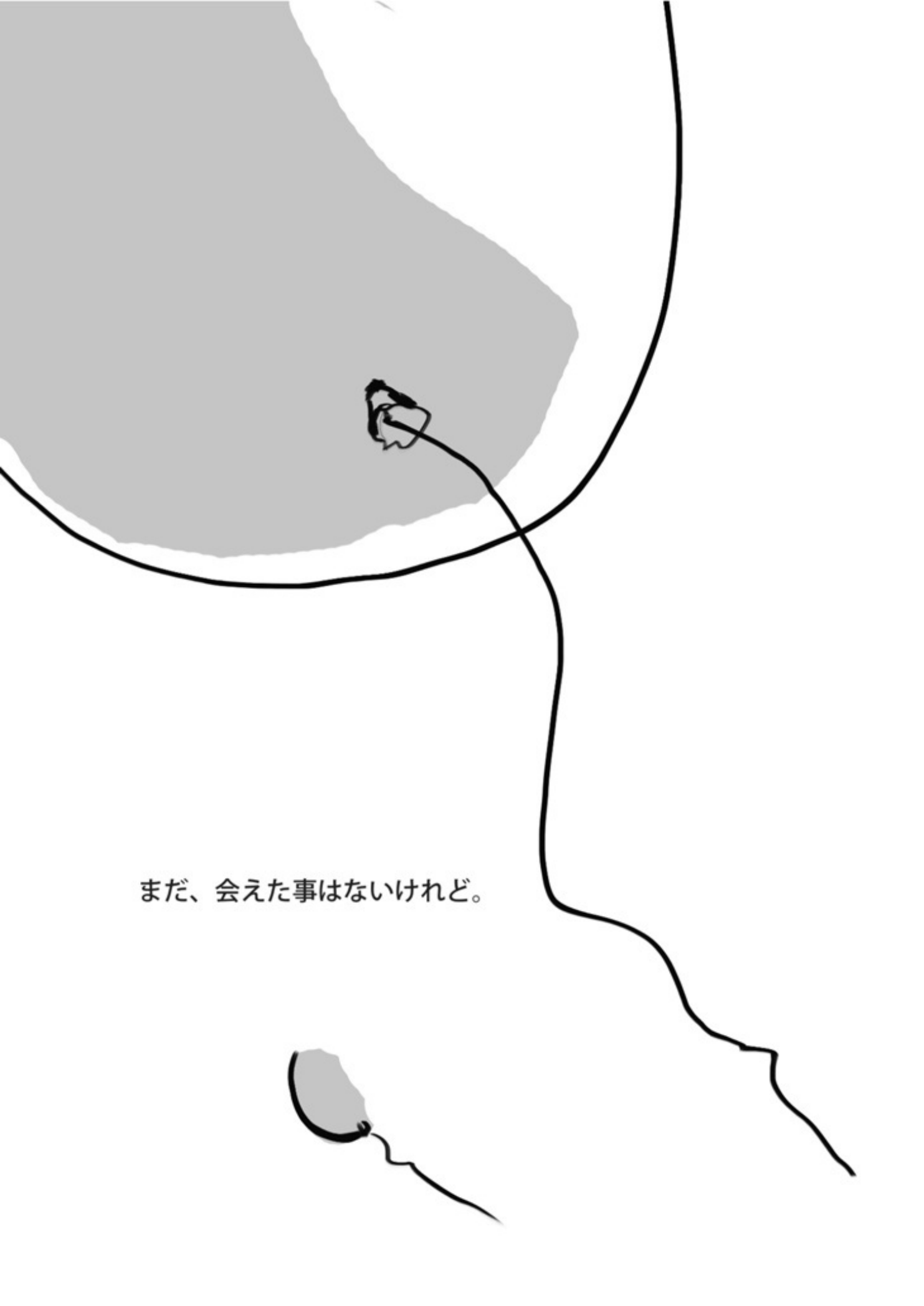
羊は鼻を鳴らしました。

じゃあ、君は見たい夢が見られるのかい？

いつも、いい夢ばかりを見られるの？

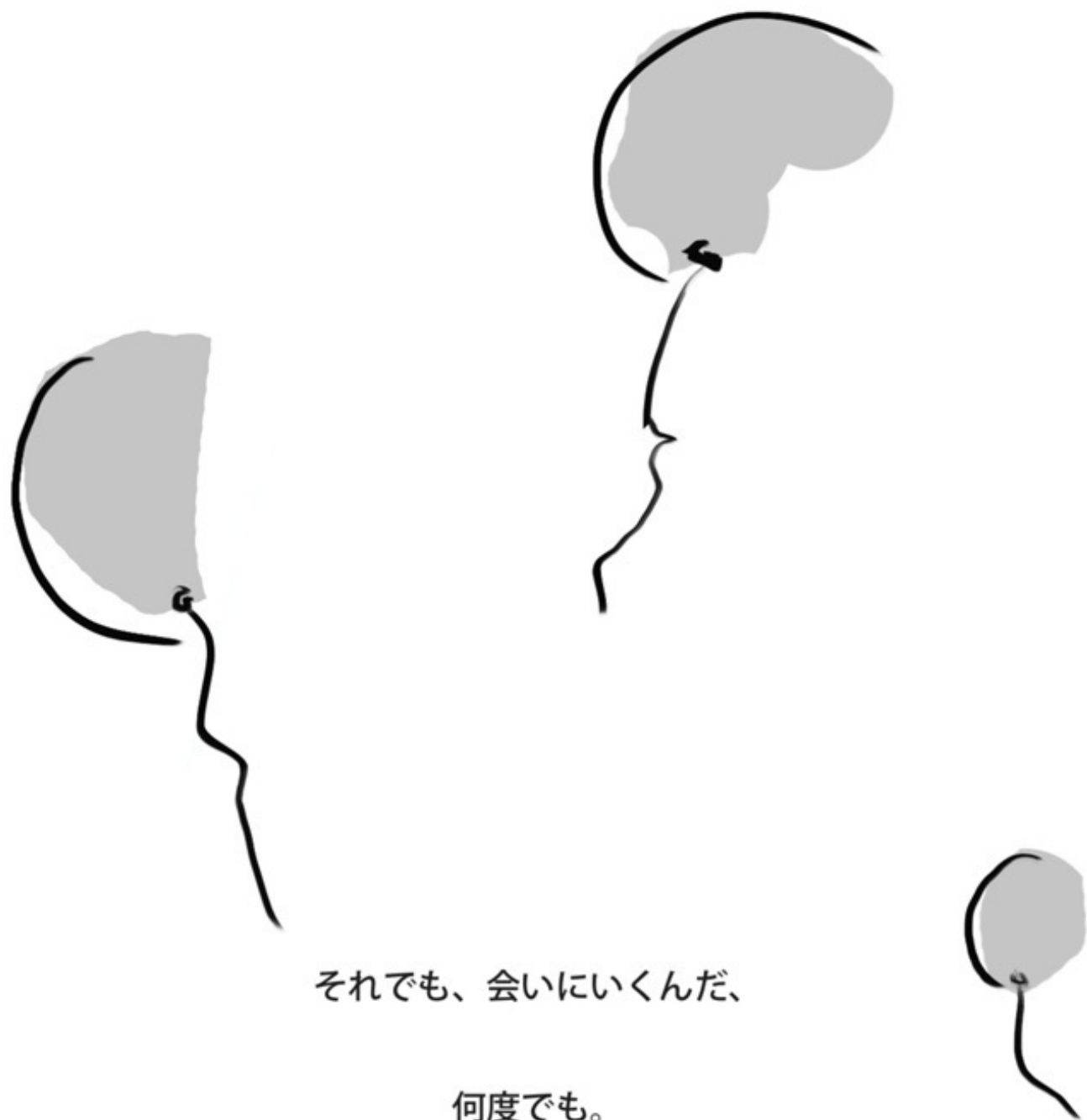
夢を操作することは、
現実をうまく生きていくことよりも、
難しいことだよ。

それに君は、目覚めた時には夢の内容はあやふやで、
夢を見たことすら忘れてのことだってあるじゃないか。



まだ、会えた事はないけれど。

わたしには、夢の中でしか会えない人がいる。



それでも、会いにいくんだ、

何度でも。

羊は言いました。

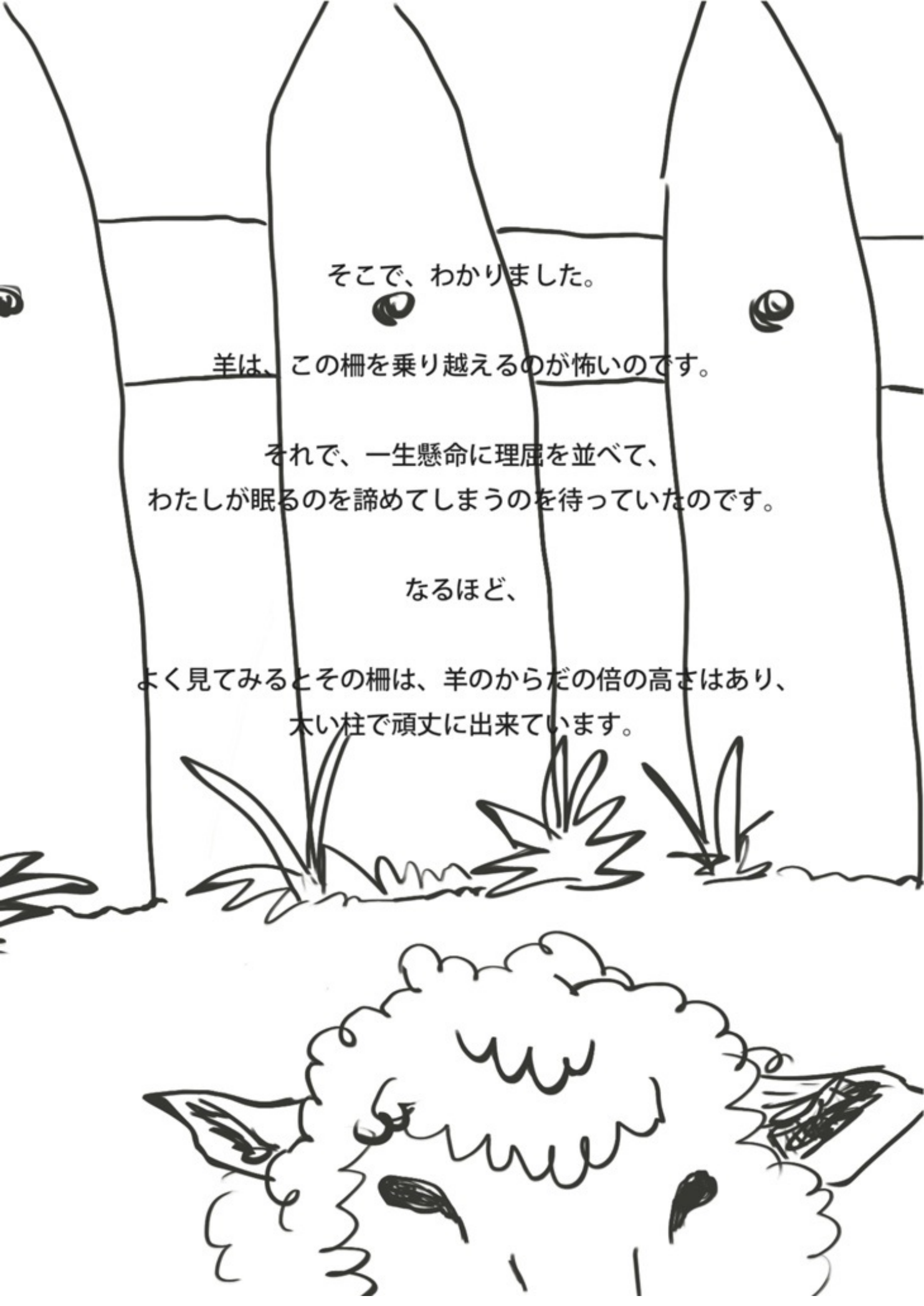
そうか、わかった。
だったら、会いにいけば良い。

でも、自分で柵を超えて行くんだ。

羊に連れて行ってもらおう、
なんて思っちゃいけない。

自分の足で辿り着くほうが、嬉しいだろ？





そこで、わかりました。

羊は、この柵を乗り越えるのが怖いのです。

それで、一生懸命に理屈を並べて、
わたしが眠るのを諦めてしまうのを待っていたのです。

なるほど、

よく見るとその柵は、羊のからだの倍の高さがあり、
太い柱で頑丈に出来ています。

わたしは、柵に向かい合いました。

すこし高い、ハードル。

数歩、後ろに下がって、助走。

そして、ジャンプ。

蹴り上げた足は、利き足とは逆になってしまいました。

力が入らない。

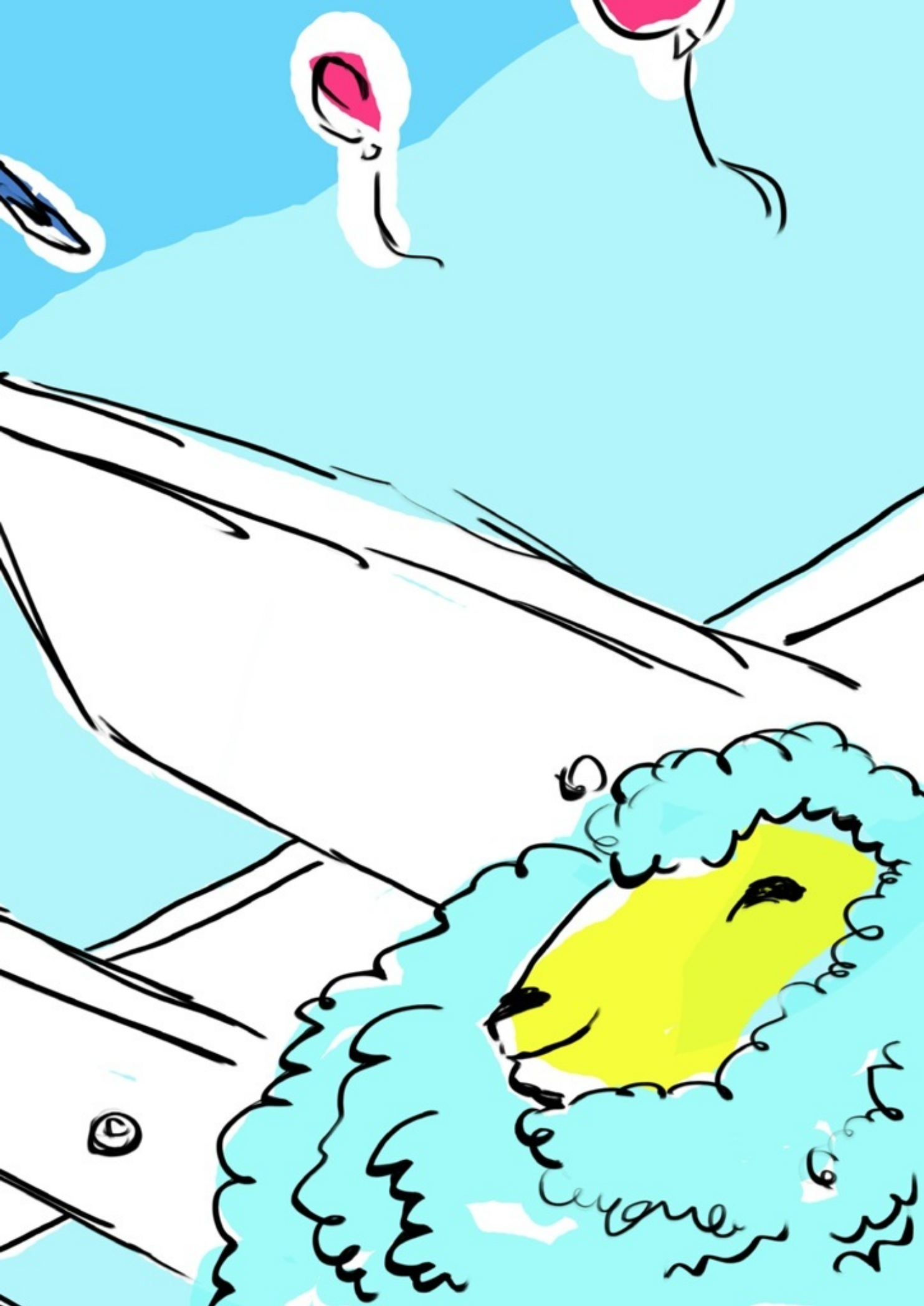
見ていた羊が、とっさに、私を柵の向こうへ押しやりました。

超えた、超えた、

だけど、

顔面から着地――





今日は台風のようなです。

じめじめした空気、

強い向かい風の中、学校に行かなくてはなりません。

きっと、帰る頃には、くたくた。

そんなことを考えているうちに、

今日見た夢のことはすっかり忘れてしまいました。